
夜はやって来る

天見酒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜はやつて来る

【Zコード】

Z0376

【作者名】

天見酒

【あらすじ】

『貴方は科学的ではない不思議な現象に困っていますか。悩まされていませんか。

そんな方はフラット社へ

どんな相談でも乗ります。幽霊、妖怪の方も大歓迎

もし、貴方がこんなポスターを町で見かけたのならフラット社へ行

つた方が良いでしょ。う。

もうすぐ夜はやって来るでしょ。から。

人と人ならざるモノの物語

いつかの別れはやつて来る

霧が静寂な夜を支配している。コンクリートの壁に挟まれた路地。白い視界に一定間隔で射し込む赤い光。そして、白い霧に混じる紫煙。その煙が発生する元を見下ろす人。その後ろに控えている制服姿の人たち。

「やつと来たな。愛弟子」

腹に大きな穴が空いている人とは思えない台詞だった。そんなことを言いながらも煙草は口から離さないのは流石ヘビースモーカー。

「何で独りで行つたんですか？起こしてくださいよ」

もうこの人の前では泣かない。絶対に。だから、泣き声は出ていいな
い筈だ。

「いやあ、余りにも可愛い寝顔だつたから、起こすの可哀想だと思つてさ」

「先生にそんな気遣いを受けたのは初めてですよ
本当に適当なことをいう人だ。その人はおもむろに眼鏡を外す。

「これ……やるよ」

大振りな腕の動きの割りに飛ばない眼鏡。地面に落ちるぎりぎりで手に収める。

「それ、卒業証書。ミーナイモノをミルための眼鏡。もつちよい、
それで世界を見てみな…」

□から地に落ちた煙草。

この人の前では決して泣かなかつた。自分の前に横たわるのは、もう聞くことも見ることも出来ないモノだから。

泣き叫ぶ。後ろで何か発している人たちの声が聞こえないように

都會を支配していた霧は、雨へと支配権を譲つていた。さつきまで煙を上げていた煙草は、寿命を全うすることなく役目を終えた。

西からの麗らかな春の日差し。眠気を払う為、暇に任せて煙草に火を付ける。

『副社長、私の近くで煙草を吸わないでください』

隣のワーキングデスクに座りパソコンを打つていた女性、姿は中学生に於る少女から、何度も聞いたことのある声にならない声が、愛すべき喫煙者を苛める言葉の針を綴つてくる。

「いやあ、ケイちゃんの可愛らしく働く姿を眺めながら煙草を吸うのが俺の楽しみである」

何度も読ませた標語に適当に言ひ返してやる。

『社長、今の発言はセクハラです』

予想以上の報復に慌てる俺。その文字列に誰もが認める三國一の美人女性が顔をあげる。ああ、相変わらずお美しい我らが社長。もう一度言い直そう。

社長のこの場における絶対的な発言である。

「それじゃあ、シロ君の給料から好きなだけ慰謝料もらつて良いよ

社長は天使の微笑みで悪魔な宣告をする。

素早く首から下げる、ホワイトボードに思いの丈を書き込むわが社のお金を取るケイちゃん。

『副社長の今月の給料、17万、私は53万ですね』

社長の“良いよ”が部屋に響くと同時に本社のお金を全て管理する機械の箱へ入力を始める会計士。

副社長たる俺を賣すとは良い度胸だ。そつちがそういう態度を取るならばこっちにも覚悟がある。

「「めんなさい」。ワタクシに不適切な発言がありましたことを切に御詫びいたします！」

決まった！我ながら綺麗な土下座だ！

三十万は現実的かつ大きすぎます。
プライド？そんなもので何が買えるとこいつのです！

「ケイちゃん、シロ君も反省したみたいだから許してあげて？」

ああ、さすがは社長！神の「」と優しさ！

「後、十分経つたらね」

さすがは社長！悪魔の「」と優しさ。

「軽部勇一、只今帰りましたあ～…シロウ、どうしたの？」

バッドタイミングに現れた男。全身黒い作業着。右胸とキャップにf1atのロゴに入る服装。その男の後ろから入って来たカルが煩いと言わんばかりの顔をしたイケメン男児も俺の様を見て疑問符を

黙つて浮かべる。

「シロ君がケイちゃんにセクハラしたから謝罪中」
いかにも機嫌良さそうに答える社長。社長、もしかして俺は何か貴女の気に障ることしましたか？いつもこの社長は俺にもつと優しいはずですよ。

「ナニいー！俺のケイちゃんにセクハラだとあー！シロウ、テメエー！なんて羨ましいことを！いや、違う！何故、俺に相談しなかつた？これも違つて！俺のケイちゃんに俺の断りなく手を出すとは最低だぞ！」

カル、それも立派なセクハラだ。

「ケイちゃん、カル君の給料からも好きなだけ慰謝料取つて良いよ

『この男からは本気で取りますよ』

結果、床にひれ伏す人間が増えました。

「遠慮しないで入りな。おい、客が来たぞ…、何してんだ、お前ら？」

カルやクロと同じ服装の中年男性が、おそらく女子高生だろう制服を着た女の子を連れて入つてくる。

二人の視線は当然俺たちへ。

「セクハラに対する謝罪中です」

俺たちをケイちゃんの前にあるティスクに座り見下ろすクロが分かりやすく状況説明。

緊張しているだらうその女の下、床に屈る俺たちと皿を叩わせた
ことでのひに身を強ぜさせた。

愛した人は死んでもやって来る 1（後書き）

ご免なさい！

更新遅いです。なるべく早く更新するよう心掛けます。

そして、評価をくれた方、本当にありがとうございます！

愛した人は死んでもやって来る 2

依頼人に成人男性の悪いイメージを「えた事務室から場所を強制的に移して応接室へ」案内。

この部屋に居るのは、我らが社長と会計事務にすら負ける権威無き副社長の俺とお茶を差し出す副社長より権威のある会計事務のケイ、お若き依頼人。そして、そびえ立つ一枚。

「お茶をどうぞ」

「アツ、ハイ…」

社長の勧めにより、慌てるようにお茶を啜る女の子。まあ、こんな得体の知れない事をやってる大人たちに囲まれたら緊張するだろう。

「それではお名前聞いても言いかな?」

「吉田由子です。エツト、露花高校の一年生デス」

緊張ガチガチですな。

「私はこのフラット社の社長の平夏菜です。タイラ・カナ隣に居るのが一応副社長の真内士郎君で、お茶を運んでくれたのが小針経ちゃんね。年上ばかりだけどあんまり緊張しなくても良いよ、敬語とかも気にしないで良いからね」

社長がこれまた誰が見ても落ち着くような無邪気な笑みを浮かべる。

「アノ…。」めんなさい。実はそんなにお金持つてなくて…、今、三千円しかお財布に入つてなくて」

彼女の必死な様子に申し訳ないが笑いがこぼれてしまった。

「大丈夫だつて、高校生からぼつたくるほど食つに困つてねえよ。只で良いから話してみな。ここに来るからには、それなりに困つてんだろう?」

まあ俺はなんて優しいんでしょう。

ありや、依頼人の目から涙が。えつ、俺ですか?俺の言い方に何か問題があつたのですか?

「どうすれば良いのか分かんなくて…、凄く怖くて…、でもこんなこと誰も信じないし…、それで街でポスター見かけて」

遂に顔を手の甲で拭い始める。まあ、言いたいことは何となく分かる。あのポスターが見えたつてことはそれなりの事態に巻き込まれてる可能性も高い。

「そつか、怖かつたんだね。辛かつたよね。もう大丈夫だよ。お姉さんたちが何とかしてあげるからね」

依頼人の隣に移動した社長は依頼人の背を擦つてあげながら赤子をあやすような声音で語りかける。

「ゆつくりで良いから、話してくれるかな?」

社長に諭されてから暫くして、少女はしゃくりあげながらも、彼女

が二二したこと語り出した。

三日前、彼女が付き合っていた彼氏の一回郎。学校を終えた彼女は彼の墓へと参った。なんて良い子なんでしょう。既に彼の家族が昼に訪ねて居たようで磨かれた墓石に彼女は花を備えて帰ったそうだ。

その帰り道には既に日は暮れ始め、周囲は薄暗くなっていたそうだ。逢魔が時。朝の世界と夜の世界が重なる時。この世とあの世の交わる時。

その時、彼女は逢ってしまった。既にこの世のもので無くなつた彼に。

彼女は語り続ける。話すのを止めるのすら恐怖しているようだ。

「はつ、始めは全然気付かなかつたんです。暗い道だつたから、誰か他の人かと思つて、でも、後ろから段々とあの足音が近づいて来て、それで怖くなつて走つたら、後ろも走つて追つて来て。後ろから私の名前を呼ぶて余計怖くなつて」

名前を呼ばれた。

「返事を返したのか？」

「い、いえ、怖くて」

それが正しい。あの世の住人に下手に返事を返してはいけない。結び付きが強くなつてしまつ。

あれ、ケイちゃん何故睨むの？あのう由子ちゃん、お兄さんは全然怖い人じやないからね。優しく質問しただけだからね。

「それで、その後はどうしたのかな？」

社長が由子ちゃんの背中を擦りながら続きを促す。

「家に逃げ込んだんです。そしたら、私の名前を呼びながら戸を叩く音が聞こえて、お母さんが帰つて来るまでずっと。お母さんに言つても信じて貰えないし」

「家に招き入れては無いよつだな。

「それでその日は終わったんだけど、昨日の帰り道にまた足音が聞

「えて来て、逃げたんだけど腕を掴まれて、振り向いたら彼の顔が
合って、無理に振りほどいて逃げたんだけど」

「ちょっと待って、腕を掴まれたんだな？」

俺の確認に彼女は首を縦に振る。それを見て社長の柳眉も曲がる。
彼女に触れたと言つことは、こいつはもう只の靈では無い。ヤバい
臭いがブンブンするべ。これは簡単な案件では無くなつたべ。
素早く片付け無ければ由子ちゃんが危険だ。その前に……。

「由子ちゃん、一つ確認するべ。彼と会つて話す覚悟はあるかい？
これは彼と話をする事になる」

強制する気は無い。でも、俺の欲しい答えは決まつてこる。彼に怯
え泣く彼女には酷な答えだが。

「……どうすれば良いのか分からないです！でも、会つて話します。
話したいです。なんで……」

泣き出す彼女。中々の頑張りだな。

「社長、この件は俺とクロ、リコウさん、ケイちゃんでやります。
ケイちゃん、クロとリコウちゃんに伝えて」

頷いてケイちゃんが部屋を出て行くのを見て、社長が由子ちゃんの
背中を擦りながら俺を見る。

「シロ君、気をつけたね」

「氣をつけろか。人に言わると重みを感じてしまうな。

眼鏡を外して、ティッシュで拭きながら、応接室の窓を見た。
のブランドの隙間からは、橙色な西陽が射し込んでいる。
薄緑色

逢魔が時。そして間もなく、夜がやって来る。

愛した人は死んでもやつて来る 3（後書き）

久々な更新です。待たせて申し訳ないです。

これからは週一、二は更新していきます。天見酒は書き出すと歯止めが利かなくなるんで少しば更新が速くなります。

ご感想、ご指摘をお待ちしております。宜しければ、お願ひします。

愛した人は死んでもやつて来る 4

夜の露花公園。千メートル平方はある敷地の一角にある球技用グラウンドを勝手にお借りして、人避けの結界を張らして頂く。これで夜の公園を徘徊する不審者やラブ・ラブ・カップル達を見ることはないだろう。

「あの、これ、本当に大丈夫なんですか？」

由子ちゃんが不安そうに自分の足元を指差す。土に拾つた木の枝で描かれた直径五メートル位の円、その中央にでかでかと書かれた“結界”の文字。いやあ、いつもながらケイちゃんは達筆だ。

「ああ、その中に大丈夫。絶対に円の外に出ないでね」

由子ちゃんは僅かに胡散臭げに眉をしかめる。

「言葉にも文字にも意味があるんですよ。意味が生まれることは力が生まれることになります。言葉や文字を付けられることで存在意義ですら変容するんです」

ただ、立つているだけで様になるイケメン男、クロの説明癖が始まってしまう。玄人ですら分かりにくくと評判のクロの説明が素人に理解出来る筈が無い。算数の掛け算覚えたての小学生に、物理学のAINシユタインの相対性理論を語るようなもんだ。俺も相対性理論なんて理解出来ないけどね。

「要は、意味在るものには在るってことだ。深く考えても、こいつらみたいな頭でっかちな馬鹿になるだけだ」

「おお、流石、リュウさん。いつもながら渋い表情で、布で包んだ自分の背を越す長物を杖代わりに煙草を吸いながらも、分かり易く纏めて下さる。由子ちゃんも少しほな得して下さったようだ。つまりは俺とクロは同等の頭でつかち馬鹿と言つことですか？それは心外だ！」

まあ、俺も煙草を一本吸わせて貰おう。うん、それが良い。内ポケツトから取り出したボックスの中の一本に手を伸ばす。やつぱり止めた。リュウさんがまだ半分しか消えてない煙草を地面に捨てて、足で火を踏み消す。リュウさん、良い年してポイ捨ては止めなされ。いくら俺たちの待ち焦がれたヒトが現れたからと言つて……。

「あれが由子ちゃんの彼氏かな？」

「いえ、あつ、はい。ソッ、そつだと思ひます。でも……」

歯切れが悪いお答えで。まあ、仕方がないな。このグランドを照らすスポットライトが、作り出す光と闇の境界線を越える青年。ゆつくりと近付いて来る陽炎のように揺らぐ人影。その顔は、生前は中々の好青年だった事を窺わせるも、怒りに燃えている由子元に、頭には左右大きな違う角、口から異様に伸びた犬歯が見えます。

俺の田舎よりも、事態は悪化。あれは“オニ”だ。人だった悪霊の行き着くところ。

「由子、何で逃げるんだ。何で逃げるんだよ

「ああ、まあ、あれだ。ゆっくりお話をしませんかね、彼氏君」

「由子、何でこんなに好きなの？」

俺達は眼中に無いよつて。愛は盲田つてやつかな、重い想いがそこに在る。ふやけてる場合じやないんだだけじな。

ブツブツと呟きながら、近付いて来るオーラー。オーラーが出てくるんだつたら、社長はとにかくカルべらには連れて来るべきだつたかな。

「荒療治になるなあ。ココウさん、あいつ押さえ付けられる？ その間に俺が閉じ込めらるわ」

「年寄りに力仕事を任せんな」

リコウさんはそう言いながらも、以前の武器、矛を包む布を剥ぐ。やる気あるじやない。

「クロ、先鋒を頼む。ケイちやん、適当に支援してやつてくれ」

三つの短き棒をねじり付けた棒を既に構えるクロに確認。

「あ～、また確認するナニ、由子ちやん。君は絶対にそこから出ない愛刀に力が入る」

震えながらも頷くのを確認。俺も手に持つ俺の片腕程の長さしかない愛刀に力が入る。

「……それじゃあ、GOだ！」

言つた途端に飛び出すクロ。直ぐに相手との距離が詰まり、首を田

掛けて、斜め上から振り下ろす。

かつてえな～。クロの棒を用いた打撃は結構重いぜ。怯みもしゃしない。クロが直ぐに棒を引く力を遠心力に変えて、第一撃を脇腹へ。今度は効いた。

横滑りに倒れるオニ。直ぐに方膝を立てて上げた顔にクロの突きがささる。生身の人間ならば首の骨が折れる強打突。でも、こいつは首の骨なんて概念は、とっくに無くしてるけどね。だから、クロの突きを受けても蛙の面に水。しかし、クロを先鋒に出した甲斐はあつた。

立ち上がり、クロへ拳を振り上げるオニさん。ようやく、俺たちを彼の恋路を阻む忌々しい奴等と見てくれた。さすがに由子ちゃんを餌のままはいけない。鈍い音で空気を震わす腕。クロの回避は至極当然の判断。人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られて死んでしまえと言つが、オニに殴られたら確実に死ねる。そういう事例もあるからね……。

クロが相手の攻撃を自分に集める為に付かず離れずの距離で豪腕を交わす中に、ケイちゃんがクロの後ろにしゃがみ込む。クロがそれを確認して、ケイちゃんの後ろへと軽快なワンステップ。ケイちゃんが手に持つたメモ帳の切れ端を地面に押し付ける。地面に現れる膝元ぐらいの深さの穴。バランスを崩すオニに突っ込むリュウさん。オニの腹を深く突き通す。そのまま押し倒し、地面にオニを串刺しに。由子ちゃんから僅かな悲鳴。ちよい、健全な少女に見せるもんじゃないよね。でも、手を抜ける相手じやないんだよね。

地面に矛で張り付けにされたオニが矛の柄を両腕で掴み引き抜こうとする。リュウさんは、それを押さえ付けているが、矛は上へと押され始める。

「シロウ！もたねえぞ！早くしろー。」

タイミング良くこちらも準備は整いました。傍観者に徹するのは一時休止。俺もオニに向かつて迅速に動こう。

俺が動き出し、リュウさんが素早く矛を抜いて下がる。リュウさんが空けた席に俺の愛刀を突き刺す。

その愛刀の刺さるオニを中心に俺のチカラで地面に描き出すは、バランス良く五本の直線で形成された星形図形とその頂点達を結ぶ円。オニの力は弱まり、暴れようとしない。

オニさんが動けなくなつたところで、一仕事終了かな。少し由子ちゃんに働いてもらつて、俺は煙草休憩に入りますかねえ。

愛した人は死んでもやって来る 4（後書き）

この小説は伝承などを天見酒フィルターで解釈した作品でございま
す。

設定上おかしなところは多々あると思いますが、皆様、生暖かい目
で見守ってやって下さい。

腹に俺の愛刀が刺さり、ぐつたりと五芒星の上に横たわるオー、いや、オードった者。

「邪氣も抜けて、少しほ落ち着いたか？」

煙草を口から外して尋ねると首を動かし口を動かす幽霊君。

「い」迷惑を掛けました。すいません」

由子ちゃん同様に礼儀正しいね。関心だ。

「僕はルール違反ですよね。これからどうなるんですか？」

夜空を眺めながらそう聞いてくる。

「そいつは俺の知ることでも、決められることでも無いな。閻魔様に聞きな。そこまでの道は開いてやるよ」

「それでは、お願ひします」

「これまた素直だね。もう少し足搔いて貰いたい気もするけどね。まあ、そう急ぐことも無いでしょ」。

「十分間だけやる。彼女と御別れしろよ。また、こっちに帰つて来ないよう未練を全て棄てて置いてけよ」

由子ちゃんを残しその場を離れる俺達。幽霊君が許しを乞うつ涙声が

聞こえた。

何を謝つているのだろうか。こっちに戻つて来たこと、彼女を怖がらせたこと、それとも死んでしまったことか。まあ、俺には関係の無いことと割り切ろう。死んだ人間が何を思うか何て分かりようもないしね。

十分後、彼は在るべき場所に帰つた。ただただ泣き続ける由子ちゃん。俺達に掛ける言葉もあるはずなく、このまま公園で朝日を拝む訳にも行かず。

「クロ、ケイちゃん。由子ちゃんを家まで送つてあげて」

俺の指名した一人に促されて歩き出す由子ちゃん。少し冷たい対応だつたかな？

「由子ちゃん。さつき、リュウさんが意味が在るから存在し、存在するから意味があるって言つたよな？」

泣き顔で振り返り、頷く少女。

「今、ここに彼は存在していた。それがどんな意味があるのか。良く考えてあげな」

まあ俺つて、人生の後輩に助言を与える良い大人ですね。お節介かも知れないが言わずにいれなかつたのが本音だけね。由子ちゃんよりも、俺がセンチメンタルなんだ。

三人の背中が闇に消えたところで、リュウさんが煙草の灰を落とし

ながら口を開く。

「それで、お前はあのオーネが存在した意味をどう捉えるんだ？」

鋭いことで、先手を盗られた。それを聞くためにリュウさんに残つてデータしてゐるのに。

「おかしいよな~。悪靈がこんなに早くオーネに成るなんてね。リュウさんの見立ては？」

眼を細めながら、流し眼を送る中年男性。社長とかにやられたドキドキするんだけどなあ。

「あの幽靈の恋人への想いがとても強かつた

オーネになるには十年かそこらは負の想いが必要。その説だつたら變つて偉大だね。

「それか、他の強い邪気に曝されたか：だな」

俺もそつちの説を指示するね、オーネさんが急に現れたら。

そして、確信はないが俺とリュウさんが同時に想い描いていいるどうアイツの顔。アイツが関わつてゐる可能性。

これは「れはとても面白い」とになりそつだ。愉快な狂乱の幕開けかな。

愛した人は死んでもやつて来る 5（後書き）

やつといせ、一話が終了しました。

次回、本作品のメイン主人公が登場いたします。やつと出でますよ。

えつ、シロウがメイン主人公じゃないの？違いますよ。まだメイン主人公は出でてきて無いもん。

天見酒の書く、迷走する迷作『夜はやつて来る』これからも御応援よろしくお願ひします！

日曜日。朝の六時半に家を出る。休日も学校に行くなんて、と普通は思うのだろうけど、私にしてみれば、一日を自宅で過ごすことほど気の休まない時は無い。まだ学校で部活をやつていた方がマシなんだ。

自転車を漕いで、いつもの道で見かける休日の関係無いいつものヒトたち。

垣根の前で一日中朝顔を眺めているお婆さん。ガードレール前に立つている血塗れ片足の少女。最近になつて良く会いつ、首に生々しい縄の後を付けながら毎日通勤しているサラリーマンさん。

目新しいことは何も無い。今日も何事も無い平凡な一日だ。私にとってはだけど。

でも、今日は違つた。とても大きく違つた。

今日から私は非常識の玄関から、非常識の住人に引き込まれて行く。夜の世界へ。

自転車で十分、電車で十分、露花駅。後は十分歩いて露花高校。少しは気分良く目的地に着けると思つてた。

駅の柱に貼つてあるいつもの一枚のポスターが私の目に止まる。黒い下地に白い文字。普通のポスターじゃないのは分かる。何か不思議な感じがするから。

私と同じにミえる人が居るかも？私の問題を何とかしてくれるかも。このフラットを訪ねてみようか何度も迷い、何度も私の引っ込み思案な性格が勝つていて。

私の頭に突然、強い衝撃が走る。

「な～に、見てんのかな～、幽靈女」

竹刀袋で肩を叩きながら嫌な笑みを浮かべる男。本当に嫌な奴に会つてしまつた。

「何、幽靈でも見えてんのか～？幽靈とお話し中かな～？」

いつもの嫌味。言い返したところで意味は無い。というのは、言い訳。悔しくてしようがない。私は言い返す勇気が無いだけなんだ。

黙つて堪えている私に、気分を良くした先輩は、私なんか居なかつた者にして去つて行く。恐らく、今日の部活の前に、あの先輩から駅の柱の前で何かを見ていた靈感後輩の話が面白可笑しく語られる事だろう。

少し部活に出たく無くなつて來たけど、サボつたら余計何を言われるか分かつたものじゃない。家には帰りたくない。

行くしかない。どつちみちこれが私の日常だ。氣味悪がられ、蔑まれる。もう覚悟…、諦めは着いた。

そんな私の日常は先生によつて変えられていく。

黒猫といふ人はやつて来る 1（後書き）

ハイ、女の子を主人公にしてみました。

書けるのか？天見酒よ？いや、書くのだ！天見酒よ！

更新遅くてすいません！頑張って早めに更新をします。

気付いた時には既に西日が射している剣道場の裏手にある石階段。鍵を閉めに来た用務員のおじさんが一人で雑巾をかけている私に声を掛けられなかつたら、時間の無常な経過に気付かなかつた。

まだ、二年間時間を見ること以外ほとんど使われていない携帯時計となつてゐる電話は16:30をディスプレイに表示してゐる。唯一、親以外で登録されていて、何回かメールのやり取りをした事のある先輩に、始めてこちらからメールを送るかどうか悩んでしまう。

今日、風邪を引いて休んでしまつた先輩。お見舞いにメールを送るぐらいに、いや、私にとってはそれ以上にお世話になつてゐる。だから、今ここでメールをする事が何だか四季先輩に、私が今日の事を告げ口したい気持ちが見えるようで嫌なんだ。

四季先輩を心配する気持ちも確かになんだけど、先輩のメールアドを前に指は動かず、結局、食べ頃を過ぎた弁当の包みを開く事にする。こつやつて、一人で吃るのは、いつもの事。クラスメートが学校に居ない休日の部活には、四季先輩がつまらない話題しか持つてない後輩にわざわざ付き合つてくれるけど。家に帰つたら、やつぱり勇気を出して、早く元気になつてくださいのメールぐらいは送るべきだ。

「ヤア」と私の隣で高い声が一つ。私の隣にちょこんと背筋を伸ばし礼儀正しく座つて、つまらない私の顔を見上げる黒猫。

「えつと、分け前が欲しいのかな? 猫ちゃん?」

気分がかなり良くなつた私は手のひらに一欠片の卵焼き乗せて差し出す。美味しそうに食べてくれる猫。可愛い。オレンジな光に照らされる綺麗な黒い毛並み、そして、金色に光る優しい眼。私は心が和やかになり、撫でたいと言う欲求が出てくる。私はこの可愛らしい不法侵入なお相伴者がとても嬉しかつた。その猫の後ろで静かに降られるもう一本の尻尾がミえて少し警戒心が生まれるまで。

「えつと、猫さんは化け猫さんですか？」

敬語になつて通じるかも分からない人間語で話し掛ける。

「やはり、お嬢さんにはミえていよいよつだね」

黒猫は首を曲げて自分の尾を見た後に、フリフリと愛らしく一本の尻尾を振りながら、人間語を話す。

「残念ながら、我輩は化け猫では無い」

私のミエル体质上少しだけ勉強した知識からの推理は外れたようだ。しかし、猫が我輩つて…。

「我輩は猫又である。名前は…」

「まだ無い、の？」

化け猫と猫又の微妙な違いが分からぬ事はさておき、私のある有名小説の有名な序文に続く台詞に、首を降る猫。

「親しき人達からランポと呼ばれている」

これまた、文豪の名前。黒猫という事が理由ならば、エドガーとか、アランとか、ポーとかにするべきじゃないのだろうか？

「お嬢さんの名前を聞いてもよろしいかな？」

そう言って私の顔を覗き込んでくる猫又さん。家族で唯一私と同じ体質で、私に理解のあつたお婆ちゃんに教わった事の一つ。『この世のものじゃない者に簡単に名前を教えちゃいけないよ。名前を教えたら取り付かれてしまつからね』

この猫又さんはとても紳士的な態度だけだ、文字通り猫を被つた恐ろしい猫又かも知れない。しかし、相手は名乗ったのに、此方は名乗らないというのは失礼だから、少し迷つてしまつ。

「おー！ランポ何やつてんだ？仕事サボつて女子高生を口説きやがつて」

物言いとは違ひ笑いながら近付いて来る見知らぬ男性。黒い帽子に黒いジャケットに黒いズボン。

「我輩は此方の不思議なお嬢さんと少しお話ををしていただけだよ。お嬢さん、これは我輩に名前を付けた真打士郎という者だよ」

ランポさんに紹介された真打さん。服装を変えれば何処にでも居そうな眼鏡の二十代ぐらいのお兄さん。この人がビジネススーツを着れば、普通の新米サラリーマンに見えるし、工場の作業着を着れば、普通の工員に見える。私服を着ていれば、パチンコ屋に座つて居ても可笑しく無いし、鉛筆を耳に挟んで競馬場を競馬新聞を持ちながら彷徨いて居ても違和感が無さそう。若じよつて、おじさん臭そうな感じの人だ。

失礼するよと私の隣にランポさんを挟んで座つて、慣れた手付きで煙草を吸い出す仕草とか。校内全面禁煙と言つ規則を教えるべきだろつか？

「確かに不思議なお嬢さんだ。君はミミるの？」

眼鏡の奥に輝く優しそうな瞳。ランポさんが居る今、私よりも不思議なこの人に嘘をついても仕方がない。ランポさんと普通に話す様子から、この人もミミる人なのだろうと思えば、戸惑いも薄れる。

「そうか。名前、聞いて良い？」

遠慮がちに頷いたと取られただろう私は、ランポさんに聞かれた時と同じ迷いを感じる。でも、この人は私に危害を加えようとはしないだろう。不思議な気配を感じるけど、生きてる人間だろう。

「瀬川七です」
セガワ・ナナ

「ナナちゃんね？」

久しぶりの自己紹介に、煙を吐きながら笑う真打さん。しかし、真打さんの眼鏡の奥の優しそうな眼は直ぐに険しい物に変わる。

「ナナちゃん、悪いんだけど、今日はそのお弁当はしまつて早く家に帰つた方が良い。この学校は今ちびつと、いや、大分危ないから」
真打さんの忠告。この学校が危険? どういう事だろつか?

「なるべく急いだ方が良いかも知れない」

固まつてしまつた私を急かす、眼が怖い真打さん。頭では理解出来ないものの、その声に慌てて食べ掛けのお弁当を片付け始める。

そんなやつと動き始めた私を襲つた急激な全身に鳥肌が覆うような寒気。真打さんから、舌打ちが聞こえる。『ンボさんから、私の心配する声も。

でも、私の心の中を巡る言い知れない感情。会つたばかりなのに、良い人だと思えるこの一人と良い猫又だと思える一匹。

その人達を私の横に立て掛けている竹刀袋に収まつてゐる竹刀で思いつ切り叩きたい。叩き殺してしまつた。そんな私に在りざる感情が染み込んできた。

黒猫といふ人はやつて来る 2（後書き）

当小説は、某偉大なる文豪達とは何ら関係は在りません。

愚作者が某偉大なる推理小説家が大好きなだけです。

そのベンネームは某アメリカの小説家から拝借したという説も在りますが、先生曰く、江戸川付近を酔つ払つて千鳥足で歩いている時に思い付いたそうで。

どこの駄目小説家見習いと違つて、なんとも風流で、味のあるベンネームじや在りませんか？

「おーい、大丈夫があ？」

その声と顔に掛かる煙に我に帰る私。顔の近くにある煙草と眼鏡と瞳。そして、竹刀の入った私の竹刀袋を力強く抑える腕。私がその竹刀袋に、部活で鍛えた両腕で、かなりの力を込めて入るのに、その人の片手はぴくりとも動かない。そう冷静に分析できるほど、私は正氣に戻っていた。

「じめんなさい！」

私は何をしてしまったんだ。会つたばかりの人に殴り掛かるなんて！この人じやなれば怪我をしていたかも知れない。そんな私を優しい眼で見ている真打さん。その別段怒つていない表情に、余計、穴が合つたら入りたくなってしまう。

「ナナ君。具合は大丈夫かい？我輩が一応、周囲の瘴気は祓つて措いたのだが…」

ランポさんに言われて気付く寒氣と倦怠感。でも、今は羞恥心の方が勝つてる。

「はい、大丈夫です。すいません」

頭を下げたら、もう上げられない。このまま、土下座をしてしまいたいぐらい。

「まあ、今はそんな事をしてられないから言つぞ。ランポから離れ

るな。オッケイ? だあー、リュウさんとカルも連れて来るんだった
ー

真打さんからの愚痴混じりの指示に頷くと、真打さんがグランドの方へ駆けていく。

「あつ、ちょっとナナ君。我輩達はこいで、待つてよいつて

少し興味がある。少しだけじゃないから、真打さんの指示通りにランポさんと離れないように片手に抱え、竹刀を持ったまま駆け出したのだけど。

真打さんには直ぐに追い付けた。剣道場の正面、グランドに入った所で、女性の人と止まっていたから。グランドに溢れる異形な者達を眺めていたから。

「駄目だね。携帯通じないよ。完璧に私たち閉じ込められちゃたね? 正に壺の中に放り込まれたムシだね」

場違いにもおつとりと笑っている女性。凄く綺麗だと思つ。服装は真打さんと同じ黒づくしの作業着で色氣の無い物だけ、整つた目鼻に風にそよぐ長い黒髪。

そんな美女と真打さんの後ろに広がるのは、地獄絵図。鬼らしきものも居れば、蛇らしきものも居る。その姿からは何か判別出来ず、ただ生きて無いという事が分かるだけのもの。それらが一応になって殴り合い、噛み付き合い、身体が千切れても構わず、咆哮しながら殺しあっている光景。普通の人より色んなものを見て来た私でもこんなおぞましいものは見た事がない。

ランポさんがさつき、瘴気を祓つたと言つた。私の曖昧なオカルト

知識では、瘴気は地獄に満ちる空気。人の理性を狂わせる。それが今、この場に溢れて居ると言つことなのだろうか？

「ありや、人避けの陣を張つておいた筈なんだけどな？」

「あつ、隠れろつて、言つてなかつた…よな」

女性が私を見つけ、真打さんが私を捉えて眉をしかめる。

「あの、今何が起きてるんですか？」

言い訳がましく、腰の位置に居たランポさんを少し上に抱え上げ、約束を守つている事をアピールしてから真打さんに訊ねる。

「中々、強かな子だ」

笑いながら皮肉を言つ真打さん。

「ここを片付けたら、話してやるから絶対に動くなよ。社長、この場を任せます」

そう言い、手を横に伸ばす真打さん。その手の先から消えて行く。再び現れる手と握られている長弓。それを社長と呼ばれた女の人に渡す。

「エ～、丸投げですか～？まあ、良いけどね」

その真打さんの所業に眼を見張つていた私の心を穏やかにするような笑顔を向けながら、弓を受け取る女性。私に背を向け、綺麗に姿勢を正し、弓の弦を引く。顔から笑みは消え、その集中している姿に矢は使わないと聞ける状態ではない。

静かに優美に弓を引いている女性。その女性の身体から白い湯気の
ようなものが溢れ出すのを見たような気がした。

一瞬後、響いた弦の音。たつたの一音。長大に壯厳に。

その弦音で感じていた寒気が去り、心地よい暖かさを感じる。

瘴気に取り付かれ、無我夢中に狂声を上げて戦つていた魑魅魍魎達
は静かに地に沈む。

太陽の僅かな残り火は消える。夜はやって来た。

黒猫といふ人はやつて来る 3 (後書き)

まだ一話、一話続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n03761/>

夜はやって来る

2010年10月13日07時53分発行